

一般社団法人 東京電機大学校友会

千葉県支部だより

第16号

平成25年5月1日

(一社)東京電機大学校友会
〒120-8551 東京都足立区千住旭町5番
一号館2階
TEL 03-5284-5140
FAX 03-5284-5187

支部だより第16号発行にあたり

支部長 松本 宏



この度ここに「千葉県支部だより第16号」を発行する運びとなりました。

これも、偏に関係各位のご理解・ご協力、そしてご指導の賜物であり、改めて御礼申し上げます。

先の東日本大震災で、被災された千葉県支部会員の方々には改めて心からお見舞いとお悔やみを申し上げます。

さて、暦を紐解きますと、今年の干支は「巳年」。古来より、神の使いと考えられていた白蛇に象徴されるように蛇は家を守り、財運・福運を呼び込むものとして珍重されてきました。昨年は竜年、我が母校は正に昇り竜の様に、東京千住キャンパスの開設・そしてその好評と相俟って受験生も大幅に増加しました。今年は巳年の「財運」「福運」にあやかっ

て、学園は「次の100年に向け東京電機大学の生き残りから勝ち残りへの転換。そしてさらなる飛躍へ」を目指しております。我々はそれを心から応援して行きたいものであります。

一方 校友会は今年度から一般社団法人となり代議員制になります。千葉県支部として関係各位と慎重審議の上、12名推薦させていただきました。

この度 支部長として二度目の就任です。ここで、改めて「支部役員が一致協力」する為 自分を知り、相手を理解する事により、役員間の信頼の基、支部の発展に努めて行きたいと思っております。

そこで、千葉県支部の方針として、1. 支部役員の充実 2. 支部会員の増加 3. 充実した総会の実施 4. 三支部（埼玉・神奈川・千葉）連絡協議会の継続（出来れば東京支部を含めた会に拡大）5. 拡大見学会（首都圏支部全会員対象）の実施 6. 支部独自の支部だよりの継続発行（今年第16号「A4、8ページ」7. 大学サポート募金（東京千住キャンパス創設事業募金改め）への協力としました。千葉県支部は、会員各位のご意見を基に「支部役員が一致協力」して、全国支部の中でも、最も充実して、活気ある、そして、楽しめる支部になるよう、一層努力して参る所存であります。

今後共、会員並びに関係各位のご指導・ご協力を切にお願い申し上げます。

終わりに当り、千葉県支部関係各位のご健勝・ご多幸をご祈念申し上げます。支部だより第16号発行にあたっての挨拶にかえさせていただきます。

ご挨拶

学校法人東京電機大学 理事長 加藤 康太郎



校友会千葉県支部の皆様におかれましては、松本支部長のもと、日頃から講演会や見学会をとおして、会員相互の親睦と研鑽に努められてお

りますとともに、本学園の発展にご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

我が東京電機大学は、昨年4月に東京千住キャンパス第一期工事を完了し、次の100年に向けた基盤整備が整い、「DOLルネッサンスと進化」を推進する大変大きな好機を迎えております。本年は「次の100年に向け東京電機大学の新たな飛躍を願って」生き残りから勝ち残りへの転換。そしてさらなる飛躍へ」の年にしたいと存じます。

本学は、昨年の週刊東洋経済「本場に強い大学」（10月27日発行）で、国公私立754大学中、9位にランキングされるなど評判も上々です。これを追い風に、学生募集力の強化、就職に強い大学づくり、さらに財政健全化等、現在、本学がかかえる当面の諸問題に勇気と自信をもって解決し、さらなる発展を目指す所存であります。

また、こうした状況を踏まえ、昨年6月古田学長を委員長とした将来構想企画委員会を立ち上げ、「将来の東京電機大学のあるべき姿について示されたい」という命題を諮問し鋭意検討しているところであります。本件については、全学的、卒業生を含めた東京電機大学人全員が議論に参画していただきたいと思っております。

さて、入試につきましては、新キャンパス開設の移転広報の成果、また不況による理工系回帰現象もあり、5年連続で志願者増を達成いたしました。

就職につきましては、依然厳しい状況が続いており、本学においても苦戦を強いられておりますが、「就職に強い大学」のブランドを堅持すべく、全学挙げて就職支援策の強化に取り組んでおります。厳しい中でも何とか前年並みの内定率を維持しておりますが、この就職に関しましては、とりわけ卒業生の皆様のお力添えが不可欠であります。ご支援、ご協力を重ねてお願いいたします。

「東京千住キャンパス創設事業募金」につきましては、千葉県支部の皆様をはじめ、多く

の方々からご厚志を頂戴いたしました。おかげさまで、現在約15億円に達しております。

また、東日本大震災学生・生徒修学支援募金におきましても、沢山の厚志をいただいております。厚く御礼申し上げます。平成25年4月からは「学校法人東京電機大学サポート募金」制度を立ち上げ、恒常的にご寄付をお受けする体制を整備したところでございます。今後とも引き続きご協力のほど、お願い申し上げます。

本学園のさらなる発展のためには、卒業生と母校の連携は不可欠であります。千葉県支部の皆様には、引き続きより一層のご支援、ご協力を賜りますよう、改めてお願いする次第であります。

最後に、千葉県支部と会員皆様の益々のご発展とご健勝を心より祈念申し上げ、ご挨拶といたします。

ご挨拶

一般社団法人 東京電機大学校友会 理事長 渡辺 貞綱



千葉県支部の皆様におかれましては、日頃より校友会活動にご理解とご協力を賜り厚く御礼申し上げます。特に千葉県支部は松本支部長のもと、会員相互の親睦と研鑽に励まれておられ、重ねて御礼申し上げます。

東日本大震災から2年が経ち、千葉県では災害復旧・復興が進捗し、少しずつ以前の生活に戻り始められたのではないかと思います。が、原子力発電所事故の後遺症は依然として深刻な状態が続く、日本のエネルギー問題にも暗い影を落としております。

震災で被災された方々にあらためて心からお見舞いとお悔やみを申し上げます。

日本の産業界は今年に入り、アベノミクスの影響もあり、長期間にわたり低迷していた経済もようやく上向きの様相を呈しておりますが、実体経済が回復するのは半年後、一年後とも言われております。また、近隣国との

間では、尖閣諸島や竹島で我が国の主権が脅かされる事態が発生しているほか、北朝鮮ではきなき臭い動きが見られ、アベノミクスによる円安株高ばかりを喜んでいられない状況にあると思います。

この様な状況下ですが、東京電機大学は次の百年に向けた「東京電機大学グランドビジョン」の構想のもと、教育・研究の充実を図り、理工系大学のトップを目指すグランドデザインの本質的な具現化に向けた活動をスタートさせていると伺っております。

校友会は引き続き学園の発展に協力し、学生募集の支援、在学生および本学社会人コースに学ばれる方々の就職支援活動をさらに推進する所存です。

校友会は国の公益法人法の制度改革に伴い、「一般社団法人」への移行の諸作業を進めてまいりましたが、昨年8月に今後の管轄官庁となります内閣府へ移行認可申請を行い、11月に公益認定等委員会より内閣総理大臣宛に「一般社団法人の認可の基準に適合すると認めるのが相当である」と答申され、本年3月21日付けて内閣府より移行許可書を受領し、一般社団法人への移行が成就する見込みとなりました。

皆様のご理解とこれまでに大変多くのご協力を頂きましたことを厚く御礼申し上げます。一般社団法人東京電機大学校友会は本年4月よりスタート致しますが、現行の主な変更点は次の3点です。

①学園が設置する全ての学校を含む卒業生全員が会員になります。
会員区分は、校友会費を納入した正会員、会費を納入していない準会員、現役学生・生徒である在学生会員、特別会員、賛助会員、名誉会員となります。

②運営は代議員制を採り、正会員から選ばれた200名以内の代議員により決議されます。
③同窓会・支部を含めた連結決算を行います。
(詳細については「工学情報」等に掲載しておりますのでご覧頂ければ幸いです。)

新法人になりましたも、校友会活動は今迄と変わりませんが、これを契機にさらに学園と緊密に連携しながら、校友会会員様相互間の親睦や公開講演会などを中心とした研修活動を行い、会員の皆様のお役にたてる活動を進める所存です。

どうぞ、今後とも引き続き校友会に対して皆様方の温かいご支援、ご協力を賜ります様、お願い申し上げます。

また、学園と連携して行っておりました東京千住キャンパス創設事業募金は本年3月で終了いたしました。千葉県支部をはじめ多くの会員の皆様から多額の寄付を戴き、あらためて厚く御礼申し上げます。

平成25年度からは寄付者の意思を尊重し、使途を指定できる恒久的な寄付募集が始まります。どうか引き続きご芳志を賜ります様、宜しくお願い申し上げます。

結びにあたり、千葉県支部と会員皆様の益々のご発展とご健勝を心より祈念申し上げ、挨拶とさせていただきます。

東京千住キャンパスに「電大通り」誕生

東京電機大学総務部企画広報担当

昨春秋、足立区制80周年記念事業として、東京千住キャンパスの1号館と2・4号館の間を通る区道の道路愛称名の募集がありました。本学からも多数応募したところ、工学部・未来科学部事務部の天谷課長が応募した「電大通り」が採用されました。天谷課長は、「足立区と本学の架け橋となることを意識するかのよう」に東京千住キャンパスを走っている区道であることから、近隣の方々のさらなる本学への愛着、本学と区とのさらなる連携強化を願って「電大通り」の愛称で応募した」と述べています。

東京千住キャンパスでは、神田では目にする事がなかった高齢者のご夫婦が散歩する姿、近隣保育園や幼稚園のかわいい園児が散歩する光景など区民の生活の息吹を実際に身近で感じられます。この親近感、技術を学ぶ学

生にとっても良い刺激や環境の提供に繋がることは間違いなく、今後も本学と区との信頼や交流がさらに深まり双方が発展することを願わずにはられません。
なお10月28日に表彰式が行なわれ、近藤足立区長より道路愛称名受賞者に表彰状が授与されました。



南房総の陽だまり

神奈川県支部 松本 袈裟文

他県支部の見学会に二度参加した理由を述べよ、との宿題が課せられた。返事はしたもの、難しく、断ることもできない。

世話役には申し訳ないが世の中には溢れる

ほどの催し物があり、それを歯の浮くような美辞麗句で飾る感性を持ち合わせない。

どなたかが、松本に見学会は猫に小判、講演会は馬の耳に念仏、難しいことの理解力は見当たらず、懇親会に酒があり、コンパニオンが会費内でもてなしてくれればこと足りると申した。

そこで、松本の好感度式を用います。

好感度 $2A + B + C + C2 + K + T$
好感度 Z は講演会や見学会の基本条件 A に懇親会 B 、コンパニオン嫌 $C1$ が花を添えると順に上昇する。会費内はこまてとする。その後自己負担たるオプション $C2$ 二次会の清算 K 、煙草 T 、行儀好感度感度には十幻滅要因には一を付す

この式での比較対象を学士会館では敷居が違いすぎるので、在学中からの会合を見るに一握りの趣味人が $C2$ の慰労を同宿で早春の雄猫よろしくの音漏れを、客室廊下に深夜まで響かせ、徘徊もする。翌朝ゴリラ様が非参加者にまで割り勘をせびる。 $C2KT$ の一要因は度重なり「焼香懇談会」になりにかない。

二度目は隣部屋が山岳部の猛者に再会し、その頃の同床異夢が、彼らが白銀の山にこもり、筆者は千葉での農業実習に参加した。「南房総の陽だまり感」でした。

第四十二回千葉県支部総会報告

常任幹事 市川 勝利

平成二十四年六月九日(土) 東京千住キャンパスに於いて、出席者五十二名で千葉県支部総会を開催しました。

十四時、喜多村副支部長の司会で進められ、松本支部長代行の、受験生が千人増加したという報告と本年度も支部だよりの発行や充実した見学会を実施していくというあいさつがあった。また、会則第十一条により、松本支部長代行が議長に選出され、議事録署名人は向井氏と市川の二人が選出された。

《議事》平成二十三年度事業報告(田中副支

部長(決算報告(鈴木常任幹事)監査報告(山本監事)平成二十四年度事業案(田中副支部長)予算案(鈴木常任幹事)支部役員改選案。松本支部長代行が二十四年度支部長に承認。その他の役員も原案どおり承認。

《キャンパスの見学会》各支部実施の後、記念撮影。

《懇親会》十六時五十分、一号館百周年ホールで埼玉支部・短大縦の会と合同懇親会を開催。

来賓として加藤学園理事長を始め、渡辺校友会理事長、各同窓会長の臨席をいただき、埼玉支部の坂口副支部長の司会で、元短大金田学長の乾杯が始まった。加藤学園理事長より「本学は数ある私立大学の中で上位二十位にランクされ、今後ますますの学園発展を願っている」、次に渡辺校友会理事長より「東京千住キャンパスへ移転し、環境や設備の充実を実感し、今後も学園の一層の発展を願っている」とお話があった。

また、小宮校友会事務局長から「一般社団法人に移行する予定」との報告があった。

中締めは千葉県支部杉沢相談役が行った。

初めての三団体合同懇親会は盛大かつ意義あるもので、大好評でした。

千葉県支部東京瓦斯袖ヶ浦工場見学記

副支部長 安藤 志朗

平成24年10月26日午後。天候は上々。集合場所は千葉駅西口ロータリー。今回の見学先は、東京瓦斯袖ヶ浦工場。参加者が凄い、見



学会最高の41名。でも、バスがここへはうまく停止できる場所が無い。13時10分過ぎてもまだ揃わない。何度か携帯をかけて、やっと10分遅れて出発。昨年に続いて二度目の観光バスをチャーター。それも木更津の房総工キスプレスと言う会社の大型バス。乗車後焦った運転手さん、細い道に入り込み、動けなくなった。藤井さんの誘導でやっと抜け出し、六川一Cから袖ヶ浦一Cと走る。行程の案内後、見学先に着くまで、各自自由に。安藤の失態で、料金トラブルが有り、参加者に迷惑が掛かりました。すみませんでした。工場到着後、LNGプラザの塚本所長がお出迎え。挨拶もそこそこ大会議室へ、世界最大級のガス工場なのに、クリーンなのである。同等なのが、お隣韓国の仁川工場。原料はブルネイ、オーストラリア、マレーシアから。マイナス162度で冷却してタンカーで輸送している。これは、体積を600分の1に小さくできるメリットがある。環境には大変配慮しており、20基のタンクの17基が地下式。地上には和束3基だけ。東京近隣全体へ供給していくため、ここにおろしたLNGは東京湾の海底幹線經由環八に沿って、横浜根岸工場、川崎扇島工場と55、000キロの配管ルートで凄圧をかけて、送っている。でも、マイナス162度で液化しているの、冷却や液体から気体などに戻すと、大変な高熱が出る。それを冷やすのは海水。おかげで、その海水目当てに魚が寄ってくる。その魚を釣りにマナーの悪い釣り人が、何でも、鍵をかけたリ、塀を高くしたりなどの対策を取っても、3日程で壊されたり、合鍵を作られるぞうだ。日本人のマナーは地に落ちたか? 運用している社員さんは12名1組、4組交替で365日フル稼働。この自慢は、事故ゼロ。LNGの漏えい事故は皆無。液化天然ガスを通すだけで、液体酸素や液体窒素も作っている。電力もあり使わず。製造したガスの半分は東電に売却。お隣が東電ですからね。防災対策もしっかり対処。昨年のJFEとはかなりレ

ベルが違ふ感じ。無色無臭の天然ガスなので、末端ご家庭でのご利用には色々の対策をしている。わざと、臭いをつけたり、大変軽いの、上の窓から即逃げるように住宅メーカーを指導している。会議室での説明の後が圧巻。入り口前の具体的な実験は、感動もの。この液化ガスでお花が簡単に凍結。ゴルフボールまでカチカチ。軟球などはガラス玉みたい。工場内見学より、この実験は皆さん驚きの様子。また、昭和48年に開始したこの工場。その時代時代のリフレッシュで、現在も世界トップの生産量と技術力、さらには環境対策を実施している。東京電力は知っていたが、あの原発事故以来、名声は地に落ちた。ここ東京瓦斯は、凄く対策を実施していたのだなと驚きと自分の無知さを恥じた、今回の見学会であった。最後は工場内を回り、実際の大きさに驚いた。なんでも、東京ドーム17倍、それを25%以上も緑化しているのだから、公園にいるような感覚。日本の実力はまだ侮れない。

午後4時過ぎに袖ヶ浦工場を後にして、再び高速で千葉駅そばに戻り、京成そばの「妙の浦」で懇親会。道路が狭いため、運転手さんに怒られながら、早目下車して会場へ。全員に名札を配布したので、学園の昔話に花が咲いている。ただ、幹事の下手際で飲み物は十分だったが、



食事を出さなかったため、おにぎりくらいは出しても良かったのではと注文を頂きました。次回はこれらの反省を含めて、さらに参加しやすい楽しい見学会にしようと、反省と誓いのお開きとなった。

カササギの橋

堀岡 佑吉

中国・日本間の貿易は昨年来、尖閣問題で大きな影響を受けている。今後もまだまだこの問題は尾を引きそうである。隣国であることを避けて通れない国同士の争いは両国にとつて大きな損失になることを痛感させられる。こうした状況下、貿易競争をやっている日本企業はヨーロッパ、米国、アジア諸国の競合先にと簡単に商売を取られていく。これは、誠に不本意である。

これまでの地道な貿易努力によって日本製品の品質の良さは、中国に確実に浸透して来ており、更に貿易拡大のチャンス到来というタイミングであったが、この問題がクローズアップし交易が大きく後退してしまった。

一方、事実以上に過剰なメディア報道が事態を更に悪化させている様に思ふ。

仕事柄、中国での生活が長いと、隣国の良さが見えてくる。二度にわたつて事件のさ中に中国に滞在していたが、対人関係やビジネスにおいてこれまで少しも問題を感じたことはない。中国人の友人やビジネス仲間は、親身になって心配してくれたがその心配も無用であった。

兎にも角にもそれぞれの国の人間が出来るだけ多く行き来し、お互いの国の良さを肌で見聞し理解を深めていくことが必要なのだと強く感じている。

さて、私の中国での研究を紹介したい。研究と言っても、全く学術的な課題ではなく、もっぱら自分が不思議に思ったことを写真に撮り、追い続けたテーマである。最初に興味を持ったのは、北京から南西に新幹線が一時間ほどの「保定」に行き来していた時に送電



線の鉄塔に大きな巣をつくる鳥がいるのを発見したのである。高圧の送電線に特有の鳥がいます。その後中国各地を回る度に鉄塔に同様の巣を発見するのである。正体不明のこの研究対象の鳥を命名したくなった。電気が好きなのだから「電気鳥」と悩んだすえ、「エレク鳥」とシャッして名付けて観察を続けた。

日本では、トキやカラスなどが電信柱の天辺に巣を作り、これが時々短絡事故などに繋がるようであるが、知ってか知らずか電線から離れた鉄柱に囲まれた部分に巣を作る。こうすれば、落雷の多い上海の西の海寧市あたりでも安全なのである。しかも、毎年巣の上に巣を作るからだんだんと巣の厚みが増し、最後には鉄塔の天辺に突き当たっているものまで見ると、この「エレク鳥」いかに送電塔が気に入っているかがわかる。このように外からも地上からも丸見えの場所で大変な子育てをやるうとするには相当な理由が有りそうである。それを追及するために、写真の枚数も飛躍的に増えていく。中国には日本のカラスのような大型で巣の雛を襲つものはいないようである。従って、上からも下からも丸見えの巣を展望の良いところに作るのかもしれない。そう、つまりうちに季節が変わり雛を子育てする「エレク鳥」の姿を捕えることが出来た。巣の大きさから考えると思ったより小さい黒っぽい鳥である。なかなか警戒心が強い鳥であり、下から見ている限り巣に入らないが、子育てが進むにつれ餌をねだる雛の要求が強まるためか、親の行動が餌やり集中

し、周辺への目配りが行き届かなくなる。人がいようがないが巣に入ったり出たりする。大学で日本文学を学んできたという中国の会社の入社一年目の女性通訳にあの鳥はなんという鳥か聞いてみた。彼女は「調べてみます。」と冷たくいってそれっきり2〜3日たった。仕事以外の質問であるし、日本文学とは程遠い質問であるから本当に調べてくれるか半信半疑であった。本当は、もう質問すら忘れていたのではないかと思ひ、昼食に行く途中の工場内の送電鉄塔の巣を見てきてみた。すると以外にも「あれはカササギ」といふのでした。「万葉集にも出てきます」「日本には美しいことばがあります」と期待以上の答えが帰って来て思わずうれしくなった。質問さえも忘れてしまっているのではないかと疑った自分が恥ずかしくなった。思わぬ相手から答えにすっかりうれしくなり、日本語の美しさを知っている中国人の娘をみて、純粹にすっかり彼女が好きになってしまった。その後その会社のトップとの会食の時にその通訳を私の「中国の娘」と決めた承認までえた。彼女も仕事以外の話の時は、「お父さん」と呼ぶようになった。同時に日本文学にうとい自分が恥ずかしくなった。中国をとかく悪く言う人がいるが、一部の極端な人間をみてそれをいうのであれば、日本にも異常な事件を引き起こすやからがあり、それがあっても日本人の代表であるかのようにいつのと同じではないかと痛感した。

そう、すっかり「エレク鳥」のことを忘れてしまひそんな興奮であつたが、再び日本に戻り鳥たちを観察していると、確かにカササギは近所の農家の軒下に巣造っているカササギを見つけた。日本のカササギの親は、雛を狙うカラスを躍起になって追い払っていた。カササギから見たら日本より中国の方がずっと安全な国なのである。

「カササギの 渡せる橋におく露の

白きをみれば 夜ぞふけにける」
と大伴家は歌っており、中国では、天の

川の兩岸に立つ織姫と彦星をカササギが橋となつて繋ぐという伝説があるという。カササギが中国の娘と私を繋いだという秘話。

神様は居るのだろうか

鈴木 修一

世の中には色々と思議なことがあつて、夢で見たことが、実際に生じる正夢であつたり、誰やら得体の知れない者から告げられた靈感と呼ばれる超自然的感覚の発想を授かり、世の中を驚かせたり、胸騒ぎがすると言つように、災いが発生し或は発生しそうな時に身に及ぶ予感があつたり、超自然的事例が神と称されるものの存在を感じるのかもしれない。人間には到底及ばない力量や予見能力が、常識では有り得ない結果を招く。ここで常識と言つのは科学的根拠に裏打ちされる得心であるが、理屈では容易に納得できないことが発生した時に神の存在へとつながるようである。こうした時の神様とは人間と同じ格好をしているらしく、或る經典には神様が自分の体軀に似せて人間を作つたとか、病める人に大きく手をかざし呪文を唱えたらたちまち病気が回復したとか、人間と同じような動作もするようである。しかしその所在は全く不明であつて、三次元を越えた世界にでも行脚しているのだろうか。どのような解釈も自由であるが、そうした作為のできる神が存在するとは考え難いのである。

神様の中には、古代に著名であつた人が亡くなった後に神に祀られる例も多い。釈迦もキリストもこうした説であり、国内でもそうした話は沢山聞く。これが宗教の概念へと繋がつていて、その教えには尊重すべきものが沢山あるらしい。

宗教については極めて疎い小生であるから、これ以上の深入りができる識見はないが、子供の頃から、神様は天からいつもその行いを視ているとか、神様のばちがあたるとか、逆に神様が守ってくれるとか、神は崇高で力強いものであつた。そんな反動でもないが、今

ではそうした希有な思考は持ち辛い。

そんな小生に対して読者の何方かが、それならお前は手を合わせる事がないのかと問われれば、そんなことはなく、元旦には初詣を続けているし、葬儀は勿論、法事にも律儀に参列している。

初詣では何を祈っているかと言えば、前年に目立った異変がなければ、有難い自然の営みにお礼を述べ、この年もまた家族共々同様に平穏な生活が過せることを願う。又苦境な年であつたなら、その対応を省みて、この新たな年に誓いをたて、それを遂行するために、寒冷な未明に身を運び、その覚悟を己に言い聞かせる所として神前は相応しい。そこには超能力を持った神と言われる方の救いを待つなどと言つ気持は微塵もなく、自然の中で善い巡り合わせに恵まれるように祈りながらも、為さねばならない事柄を自分に言い聞かせる。

また人の死はその全ての終焉であつて、その隔てとして、尊厳を祀ろうとしている時に無礼があつてはいけな思っているが、我が身の墓参とか法事などには何の期待も持ち合わせていない。ただ親や身近な親戚、親しい仲間達がそうしたしきたりを大切に考えていたとすれば、それを無為にする事もない。或いは一方において、今では家族も離散がちで、集合できる機会も乏しくなつた時代に、法事というのは良い集いの場を作ってくれていて、それをおさなりにすることもない。神と言つ言葉を肯定するならば、このような秩序を誰も必然的に做らうとする気持ちを与える風ではないだろうか。

ここで、故森繁久彌氏が曾って、TVのコラムで独演した内容を受け売りさせて貰つた。記憶に留められている方も居ると思うが、氏はヨットマンで日本の近海を周回しながら港町に立ち寄る旅をしたことがあつたよつて、その折に静岡県の戸田の集落に上陸し、住民の歓待を受けていた。

読者の皆さんの中にも覚えておられる方々が居ると思うが、我々が学生中に体育実技の単

位を取る一環として、この戸田海岸で夏休み中に一週間の水泳合宿を実施していた。小生も単位を取るために参加したことがあるので、今でも記憶に新しいが、伊豆半島のつけ根、太平洋に面しているものの円形状に挟まれたような湾になっていて、小さいながら漁船の船溜りにもなっていて、住民の殆どが昔から漁で生計をたてていた。

小生が合宿した昭和四十年当時は、車道はまだ完全には整っていないかつたよつて、沼津から海路で戸田に入った。商店も生活必需品を扱っている数件が有っただけで、そんな村里で起こった話である。

森繁氏も住民も海には馴染んでいる人達であるから、当然の事として海洋の話題になることは成行きであつたであろうが、そうした中で海難は誰もの関心を誘い、人為の及び難い所であるから神頼みは格好の材料になって、神の存在も問われる。そんな折に、奥の座を占めていた長老と思われる一人が、神は居ると断言したので、皆が多大な好奇心を抱いて後の言葉を持った。

それはまだ昭和になつたばかりの頃、天気予報も今のような精度はなく、台風が目の前に迫っていることも分からずに、沢山の漁船が漁に出ていた。その結果は台風の遭難事例としても歴史に残る程の大惨事であつたよつて、戸田でも漁師の大半を失い、集落が成り立たなくなる程の被害であつたと伝えられている。

そんな中の一人に、この長老もまだ成りたての漁師として乗り組んでいた。猛烈な嵐の中で船は転覆し、荒れる海上に放り出される。運よく船から流れ出した板切れを捕まえることができて、真暗な海中で大波と格闘しながらも、水面上に体を出せる余裕を得て、それが体力の消耗を軽減させた。長い苦闘の一夜も過ぎ、夜明けと共に嵐も去り、台風一過の晴天になった。しかし疲労と喉の渇きと空腹は耐え難いものであつて、それに睡魔が襲ってきて何度も水中に没しそつになりながら、

その板切れを必死に抱え込む。幸いな事に救助船に発見されて、もう船底でド口のように眠り込んでいた。

暫し後に、その眠っている枕元に神様が立たれ、その若い漁師に笑顔で話しかけた。神様は助かつたことを喜んでくれたので、その漁師は丁寧に敬礼を述べた。次に神様はお前を助けてくれたあの板切れはどうしたと尋ねた。その漁師は船に乗る時に捨ててきましたと応えると、神様は俄かに厳しい形相になって、馬鹿もんと怒鳴りつけて、お前を助けてくれたあの板をそんなに粗末にする奴がいるか、直ぐ捜しに行つて来いと命じられる。

驚きの中で飛び起き、そつして甲板に駆け上がり、その旨船長に頼むが、船長はそれどころではなく取り合つてくれない。甲板に平伏しながら幾度も頼み込んでいるが、救助に忙殺されていて、到頭夕暮が近づいて来て帰港の態勢になる。しかし神様の怒りに怯えている漁師は臆することなく懇願する。他に救助された者達の応援もあつて、船長もそれに従つて、今からお前を拾つた所まで戻つても暗闇の中で見つけられる訳がないだろつと言

いながらも、船をその方向に向けた。やがて船長が夜の帷のおりた大海原で、お前を見つけたのはこの辺だと言ひ、こんな闇の中でそんな小さな板切れが分かる訳がないだろつと言ひながら、サーチライトを点けた。鋭く伸びる丸い照明が、遙か沖合で救いを待つ数名の漂流者を映し出した。

見学会場所選定は苦労の連続

須田 猶興

東京瓦斯袖ヶ浦工場見学では、大勢の皆様に参加を戴き、大変有難う御座いました。今回は安藤さんと幹事を組ませて戴きましたが、見学会所決定プロセスは、簡単では無かつたです。

当初、私は県内テレビ局の見学を考えておりました。でも、こゝは、メインが「千葉県内の小・中学生十人以上の団体に限る」との

事で、どうも無理そうだなとは感じていましたが、同窓生のよしみで、何とかするのはと、安易に考えたのがいけなかつたよつて、最終的に断られてしまつた。これが提案の中心だつたので、少しショックだつた。

次に探したのが、「航空科学博物館」。航空機のエンジン図解や実物見学など、航空を科学する体験ができるの事だつたので、期待して提案。こゝの売りは、DOC8シミュレータ、成田空港の離発着を含む、20分のフライトが楽しめるの事、これだと思ひ再提案。でも、会員さんの集合に際しての交通機関の大変さや、入場時の厳しい検査など、多くの問題が出て、断念。最終的に、提案したのが、「東京大学柏キャンパス」の見学。こゝは、毎年10月に一般公開をしており、内容も単に大学の見学ではなく、頭脳集団の研究事項も見学できるし、近くに千葉県副支部長の工場団地もあり、懇親会場もありそつなので、期待が膨らんでいった。少し興味を引くのが、大学院の生命科学研究所や新領域創成科学環境学研究所、宇宙線大気海洋物性研究所等、30ものテーマがあり、わが母校東京電機大学でも使えそつなので、後輩たちにも有意義だろつと、考え追加提案した。しかし、バラバラ見学なら、凄いのですが、参加者全員を一つの方向へ導き、全体で見学できるかとなると、それは大変なよつて、まとめきれない状況となつてしまつた。とても残念な見学先ではあつた。

最後に、決まつたのが、東京瓦斯袖ヶ浦工場に有つた。実施のための詳細計画をまとめるにあたり、より良くするため、見学会場周辺の調査や懇親会場調査など、安藤さんと精力的に、検討してみた。私は、実行するなら、懇親会場は、参加者が喜ぶ内容で、料理もおいしいお店で、かつ会場も広いところが良いと心では思つていた。でも、解散後の利便を考えると駅に近く、経費に見合つたお店はなかなか見つからない。飲み放題でそれなりの料理がついて、五十名が入れる店を探すのは大

変でした。やつと見付けたのが、ご飯を付けると酒のつまみが少なくなつてお店。やはり、当日は、解散後遠方へ帰る参加者に「ご飯は出ないのか」と言われ、謝るしかなかった。もしも、ご飯が出ていたら、さらに楽しい見学会懇親会になっていたかもしれない。今回の反省材料になつた次第です。

来年の見学会懇親会は、懇親飲食経費が少しアップしてもさらにより良い内容にできるなら、と思つた。また、見学先も、各自が、関心のあるテーマをもとに募張などの展示会を自由に見て回り、その結果を皆で発表するなど、参加者の発言の機会を設け、ディスカッションが出来たら、面白いのではないかと感じたが、私の試案ですので、大多数の賛同が得られなければ、廃案かなつても、次回も多数の参加者に喜ばれる見学会にしたいと願つています。皆様お世話になりました。

スマートエネルギーWEEK2013展を見学して

田中 豊明

副支部長の堀岡さん（FTB研究所社長）が出席しているスマートグリッドフェアへのご案内をいただいたので、松本支部長、常任幹事の鈴木修二さんと私の三人で二月二十日に東京ビッグサイトの展示場に行つてきた。太陽電池展の他に、バッテリージャパン、風力発電など八件の展示会が同時開催されていた。

新エネルギーへの関心が高まる中での展示会であり、ものすごい人出て会場はこつた返していった。

堀岡さんの会社（FTB研究所）は柏の葉キャンパスの東葛テクノプラザ内で太陽電池関連をやっている会社であるが、その東葛テクノプラザ内に電大卒の社長の会社が五社もあるそつだ。

今回の展示は、FTB研究所様の太陽電池などを使った非常用電源設備という展示であつた。太陽電池素材となるシリコン結晶技術の研究開発から、太陽電池システムの販売までやっている。最近是中国との取引が盛ん



FTB 研究所ブース前にて左から堀岡社長、松本支部長、常任幹事 鈴木修一氏

になり、中国通いに追われていること。

今回太陽電池の応用として非常電源設備システムを提案していた。そこに電大の電気自動車で有名な藤中名誉教授がおい

になりました。恩師が堀岡さんに、さらにこの分野の有望性を説き発展に尽くすよう強く激励をされていたのが印象的であった。

東葛テクノプラザのビル内には、鉛バッテリーの延命剤を販売している SBN 株式会社が大卒の若手社長であり、太陽電池とバッテリーは、相性が良く一緒に展示し、またコラボレーションも考えているようだった。同じく株式会社デンソー（電気と油圧を使った会社）も同窓生で頑張っており、五社の中で年長として、後輩会社の面倒見がよく、特に測定器がいろいろ揃っている会社であるため実験計測の協力を各社してもらっているとのこと。ベンチャー同志でのコラボレーションや共同開発にも期待されている。

また、東京千住キャンパスの先生方や千葉ニュータウンキャンパスの先生方とも産学共同の動きもあるようであり、今後創立されるベンチャー企業や、公設研究設備の利用などについても参考になるかもしれない。

東葛テクノプラザには、電波暗室や、電気計測、機械的形状計測や分析解析装置が揃っており、一過性の計測や評価は極めて安価に行えて便利であると共に、貸し研究室や事務所として安価に利用できるため、ベンチャー企業にとってはなかなか便利に使えるそうである。レーザ溶接のモニタ開発の会社である西原電子や、超高速の情報検索を研究開発する株式会社イー・オー・テクノロジーも卒業生の会社であり、「東葛テクノプラザの入居

企業」で検索すれば詳細がわかるとのこと。米国のスタンフォード大学やハーバード大学の卒業生は、OB の会社同士が積極的に共同事業などに取り組み、成果を上げているようで、電大卒の横のつながりも、極めて重要であり、積極的なコラボレーションによる発展が求められると堀岡さんは話していた。

伊豆大島にて……

谷本 金吾

先月に伊豆大島に仕事の関係でなにか行く機会がありました。決して観光協会の人ではありませんが、ちよつと魅力を語ります。

伊豆大島は伊豆大島諸島で最大の島で、ほぼ中央に三原山の火口を中心としたカルデラが非常に神秘的な印象があります。伊豆大島までは、行きは飛行機で（羽田から）30 分と帰りは、夕方の飛行機（羽田行き）はないので、泊まるか、ジェットホイールで夕方に帰るかの選択になりました。何回か行くので、前に述べた通りで行き来しました。

意外と近く、こんなにかの島とは思いませんでした。丁度、椿まつりの季節で、大変に賑わっているのかな……と思いましたが、以外に、静かなまつりのようでした。

その雰囲気、椿の花を際立たせているような、気品ある花でした。椿の花言葉にあるように、誇りと、完璧な魅力を醸し出すにはふさわしい環境であり、多くは咲かず、緑深い、葉に赤や、白の花が自身ありげに、やや暗くなった夕暮れに來えて見えるのは、私だけではないと思います。

その他にも魅力がありました。やはり食べ物です。テレビでも取材のあった店を紹介してもらい、早速行きました。石焼きベッコウ井を注文。ベッコウとは、島の近海でとれた白身魚を、島唐辛子の入った醤油ベースにつけた刺身（それがベッコウよく似ている）をご飯にのせた物。さらに石焼き鍋にいたれた食べ物でした。



香ばしいなかに、島唐辛子のきいた、刺身が、ガツンとぴりつきておいしい。さらに少し残して、だし汁をかけ、お茶漬け状態で頂く、2 種類味わえて大変満足でした。食後、体がぼかぼか、あせがでる程、辛みが体の中からあつたてくれたような記憶があります。

なんととっても三原山。夕暮れのカルデラには神秘さがあるようでした。その中に馬がいたのが不思議でした。逃げないので不思議に思いましたが、実は火口までのハイキングで馬に乗って行くコースがあるそうです。が終わってました。さすがに一人で火口まで歩く勇気がわかなかつた私は、ただ草を食べている馬にカルデラの静けさにたたまむばかりでした。もちろん温泉もはまりました。海をみながら……だれと？

さまざま、大島の魅力をつらづらと書きましたが、観光にいったのではありません。管工にいったのです。……つまらないじゃれを最後にいってしまった。

大島は今年の東京国体の相撲会場になっています。周辺では、様々な整備が着々を進められていきます。機会があれば、東京都の大島へいってみたいかがてしようか。

静かな島ではありませんが、まだ三原山は活火山でもあり、まだまだ熱い島。また伊豆大島の歌に「アノコ椿の 恋の花 風もふかめに 泣いてちる」とあります。

島民もそのような情熱をもっているのだろう。

安全な原発はあるのか？

安藤 志朗

平成 23 年 3 月 11 日の東日本大震災津波で壊滅的な被害を被った福島原子力発電所、何故安全な原発を作らなかったのか？それは、古川和男教授の言葉を借りると、兵器にならなからアメリカに製造中止を強力にねじ込まれたから。戦後の日本に自由は無かつたのかと、当時の政治を批判しても詮無い事。そこで、この自然災害を教訓として、絶対に兵器

としての価値が無くて、かつ安全で、簡単に、どこでも、安く電力を作れる「トリウム熔融塩炉（MSR: Molten Salt Reactor）原子力発電」を紹介したい。

原子力発電の安全性は、次の 3 つとされている。1. 原子炉をどんな時でも確実に停止できること。2. 停止後も核物質から崩壊熱（いわゆるメルトダウン）を除去すること。3. 放射性物質の外部放出を防止できること。

これらすべてをクリアし、かつ千年単位で安全に稼働できるのは、トリウム熔融塩炉原子力発電のみである。しかし、この技術は今や風前の灯である。過去アメリカにおいてもオークリッジ国立研究所で 1960 年代に実際に稼働していた「熔融塩炉（MSR: Molten Salt Reactor）原子力発電」、しかし、軍需産業の妨げになると、強制的に廃止させられ、現在その技術を所有しているのは日本だけである。その日本でさえ、この技術を封印し、アメリカに従ってきた。今こそ、この技術で日本をいや世界を復活して、安価で安心して簡単に発電できるトリウム原発を導入していくべきと考え、ここに紹介するものである。しかし、この技術は 60 年もの間封印され、技術継続もされていなかったため、再度実用化すると考えると、これから、50 年後でないと難しいと言われている。残念である。その一つが研究者の高齢化、または死亡等でのように対応したら良いのか、ノウハウが少なくなっているからである。その一人である、古川和男先生ももう、指導は不可能な状況。それなら電機大学で考えるのは OB として必定であると思うが皆様は如何に考えてしょうか？

世界における原子力発電の問題は燃料のプルトニウムの処理処分です。高速増殖炉によつてその燃料を再利用できるように研究しているけど、開発開始から 50 年経つてもめどが見えない。そして福島事故です。しょうがなく、最近トリウム熔融塩炉を復活させようと言う動きが出てきました。トリウムは

ではなぜ、これほどいいことづくめの技術が、発展しなかったのでしょうか？これがさらに実用化されていたら、この大地震での被害は全くなかったのです。その原因が、核兵器にならないと言う事。これは兵器としてアメリカが考えていた物なので、兵器にならない発電は、駄目だったのです。さらに、熔融塩についての化学の範疇。そもそも軽水炉を含めた原子力発電所は、一種の「化学プラント」、本当は電気屋さんではなく、化学の専門家が扱うべきです。それはワインバーグもウィグナーも言っていたことで、日本でいち早くトリウム熔融塩炉の可能性に気づいた古川和男先生も言っていたことです。古川先生は1960年代からナトリウムの世界的な権威だったわけです。その人から見ると、ナトリウムを利用した高速増殖炉はきつと危なくて仕方のないものに見えていたはずで、一方、不活性な熔融塩がよさそうだというのはわかっていた。ただ、軽水炉と高速増殖炉は兵器を作るためには重要だが、兵器にならない、トリウム熔融塩炉原子力発電はアメリカや日本の路線からはずれているので、だいたい

そこで、我が千葉県支部に立ち返って考察してみると、凄い事が判ったのです。それは電機大学始まって以来、現在の千葉県支部長松本宏さんが原子燃料公社（1970年に動力炉・核燃料開発事業団、2005年日本原子力研究開発機構に吸収）に唯一合格された

小型熔融塩発電所全景図

15 kW We 小型熔融塩発電炉

格納容器

炉体

炉内右側の燃料棒

燃料燃料棒

ポンプ

0.4m

高温室

放射線遮蔽構造

廃液ドレインタンク

燃料容器

水蒸気タービン発電機

燃料燃料棒

7LiF-BeF₂-ThF₄-238UF₄

水蒸気発生器

二次冷却材系

トリウム熔融塩炉原子力発電原子炉図

方なのです。その時の原子燃料公社は、国立の東大や京大などでないといふと採用は不可能と言われた時代です。そこに私学から合格者を出したので。もしもが、まかり通るならば、その時に松本支部長が原子燃料公社に入っていたら、電機大学は世界に名だたる大学になっていただろうし、松本支部長は我々が、たやすく支部長と呼べない高貴で手の届かない博士であつただろう。さらに言つと、この福島事故もなかつただろうと考えると返す返すも悔しい思いをしているの頃です。ぜひ、再度このトリウム熔融塩炉原子力発電に目を向けて、復活してほしい物である。その原理図を添付して、千葉県支部の凄さを世に知らしめたいと考へ投稿した次第です。

原発安全革命著者古川和男博士のプロフィール

1927年大分県生まれ、京都大学理学部卒、東北大学助教授、日本原子力研究所主任、東海大学教授、トリウム熔融塩国際フォーラム理事長（株）トリウムテックソリューション社長

~~~~~

## ヒマヤラ北面へのトレッキング

錦稜会 田中 豊明

平成一八年十一月にヒマラヤの高峰ダウラギリ8167m山塊とアンナプルナ8091m山塊の北側にあるムスタン地域に行った。エベレスト、ランタン、マナスル、カンチエンジュンガ、アンナプルナ等のヒマラヤ南面へのトレッキングでは、風景は共通して緑豊かな耕作地が、耕して天に至る階段状の田畑のある農村に始まり、森林帯ときには亜熱帯のジャングルを抜け、森林限界付近にあるカルカ（家畜の夏の放牧地）等を見ながら高度を上げて氷河地形の緑の先に氷河を抱えた雪のヒマール（現地では雪の高峰をヒマールという）を見るのが一般的である。

ムスタン地域はネパールの他の地域とは全く異なり、辺り一帯が山岳砂漠で茶褐色の岩山と岩と礫と砂、それに加えて風の世界である。



北の高地より南の暖かな低地の村に移住する一家

錦稜会の森本、木下、福田、田中の四名が成田からバンコク、カトマンズを経由してポカラのホテルに入り、

来る前に高地の村から暖かい村に移住するのだそう。この河原だけでも数組に行きあった。毎年の行事だそう。川岸には緑の樹木や草があるが見渡す限りの山々は茶褐色の裸の岩山で荒涼とした山岳砂漠である。その奥に雪を輝かせたヒマールがずらりと並んでいる。見事な景観である。河原の対岸に高さ百米程の崖が出てきた。大きな渦巻きのような見事な大褶曲地層が教科書にある標本そのままの姿を見せていて、地層が隆起する速さとその力の大きさを見せられている。

カリガンダキ川の名は「黒い川」という意味だそう。チベットの黒い地層の微粒子を含んでいるため黒ずんだ水流であるからだ。この河原にはアンモナイトの化石が沢山あるとのこと、五十十程位の真黒い丸い炭団のような石を割るとアンモナイトの化石が出てくる。カトマンズの土産物屋には沢山並べて売っている。

川岸のエクリバティ2850m（エクリは一軒の、バティは茶屋、一軒茶屋という地名だそれが三軒あって正に三軒茶屋だった）に一泊、高原の砂漠のなかのジャルコット村3550mに二泊、ここから緩い登り坂の街道を聖地ムクチナート3750mに向けて歩いていった。

聖地の入口には色鮮やかなカン二（仏塔門）とヘリポートがある。マニ車（経文の入った車）が沢

山ある塀を從えた立派な山門があり、そこがヒンズー教とラマ教とが同居している聖地の寺院である。



聖地寺院山門より  
ダウラギリ 8167m の北面

この寺院はネパールは言うに及ばず遠くインドからも巡礼者が来る名刹である。最近はいンドのお金持ちがヘリコプターでお参りに来るそう。

砂漠の中に泉が湧き出していたので、聖地として祭祀されたのであろうか。半径十米位高さ三米位の半円状の石垣の上に水路があり百八の水の落とし口があり泉の水が流れ落ちている。巡礼者が一番から百八番まで順番に頭から泉の水を浴びて身を清めていた。除夜の鐘は百八ある人の煩悩をとり除くためとか仏教の教えはここお釈迦様生誕の地から遠く離れた日本の国にも伝えられたのであろう。我々も何がしかのお布施を収めてお詣りをして清々しい気持ちになることができた。

明治三十年代に仏教徒の河口慧海がこの寺院に参詣をしている。彼は日本人として初めてインドからこの地に来て滞在したのち仏教原典を入手するために一人ヒマラヤを超えて、当時は禁断の地チベットに潜入した。この街道のジヨムソンの隣りのマルファの街に彼の住居が記念館として保存してあった。

山門の前の日向で昼食をとり休憩をした。そこはダウラギリ山塊とアンナプルナ山塊を正面に見る絶好の場所である。目の前に荒涼とした砂漠の岩山、広々とした茶褐色の高原と、深く切れ込んだカリガンダキ川があり、昨日の宿泊地ジャルコット村が城塞のように一塊になっている。外側に少しばかりの耕作地（ここへ来る道の脇に灌漑用水路が続いている）の作物が緑色に見える。

それらを前景にして、白銀のトゥクチェピーク6920mを從えた堂々たる山容のダウラギリI峰8167mにニルギリ三山7061mティリチョ・ピーク7134mを前衛に、アンナプルナI峰8091m他七千米級の峰々の北面がずらりと並んでいる。ヒマラヤ（ヒマラヤの高山にある烈風がつくったと言われている氷雪の縦壁）を纏った青氷の壁が何千米も切れ落ちていて、その頂きは雪煙を上げている。高峰の北面は南面とは違っ

た凄味を見せていた。

この至福の時をいつまでも堪能して居たいが、この辺は砂漠に当たる強い日射で上昇気流ができる午後には、毎日カリガンダキ川に沿って川下から強い風が吹いて来る。昨日までは追い風であったが今日は向かい風になる。この風に向かって素晴らしい景色を見ながらジャルコット村に帰った。

## 千葉県支部総会と見学会 及び懇親会のご案内

日時：平成二十五年六月八日（土）

十時三十分 受付十時

会場：東京電機大学

千葉二ユータウンキャンパス

◎公開講演会

時間：十時三十分～十二時

◎第四十三回総会

時間：十二時十五分～十三時十五分

◎懇親会 二階職員食堂

時間：十三時三十分～十五時三十分

◎会費：三、〇〇〇円

\*講演会は公開講演会ですので、一般の方々も含め、どなたでも聴講できます。

演題「がんは予防できますか？」

生活習慣とがんの関係や最新医療に

おけるがん予防を紹介します。

講師：東京電機大学 学術博士 川井 悟教授

## 編集後記

「千葉県支部だより」の第一六号を発行することが出来ました。これもひとえに皆様のお陰と感謝しています。

八頁版になり写真を沢山掲載出来ました。記事に添えられた写真は紙面を飾るだけでなく十分にその効果を発揮しています。

皆様に次号の原稿をお寄せ下さいますようお願いいたします。

副支部長 田中 豊明

街並みを抜けて河原に出た。ここはカリガンダキ川の流が緩く、川幅が五～七百米の礫状の広い川原で流れがいく筋もの網の目のように流れている。雨季には川幅一杯に濁流が暴れているのだったが、乾季の今は河原が街道である。

上流から数頭の口バに荷物と幼い子供を乗せた老若男女数人の一団が来る。冬の寒さが